

〔病虫害の発生概況〕

〔病害発生概況〕

新侵入病害となったイネ・グラツシースタント病は九州全地域に分布することが明らかとなり、今後の発生動向が注目された。転換畑作物の大豆病害は葉焼病、べと病が広域に発生したほか、紫斑病の発生が問題となった。カンキツモザイク病（トラミカン）が九州全域に分布することが判明し、土壌伝染性の防除困難な病害であるため、今後の対策が問題となった。施設ヤキイ栽培の省エネルギー対策に伴う病害防除、ペノミル、チオフアネートメチル剤に対する耐性菌対策が依然として重要である。

稲・麦

いもち病は立毛期間中好天に恵まれ全般的に少発生となった。レイホウの作付が減少し、侵害レース303、103の急減が大分で明らかにされた。紋枯病は福岡、佐賀で少発生、それ以外の県では並からやや多目の発生となったが、出穂期以降の上位進展が抑えられた実被害は大きくなかった。6月末から7月にかけて全地域で集中雨による浸冠水がみられ、白葉枯病の多発が心配されたが、初発生が7月中旬以降となり遅れ、8月の高温抑制、9月以降に病勢進展し多発した例が多く、特異的な発生経過を示した。もみ枯細菌病は出穂前後の気温低下、少雨条件が原因して全般的に少発生となった。トビイロウンカ媒介によるグラツシースタント病が全域に分布し、とくに鹿児島北薩、大隅地区での発生が著しかった。発生は普通期稲に多く、早期稲では二番芽に病状をあらわす例が多い。鹿児島を除いて一般に発病株が散見される程度であるが、今後の発生動向が問題とされた。麦類赤かび病は出穂期以降の少雨多照条件により少発生にとどまった反面、赤さび・小さび病が福岡、大分で多発となった。近年黄さび病の発生が地域内各県から報告されるようになり、長崎では小麦に4月24日、福岡、大分ではともに11年ぶりに小麦に5月28日、発生を確認した。黄砂の飛来日と密接な関連がみられ、今後充分注意する必要がある。うどんこ病は全般に多発し、斑葉病は2条大麦に主として多発した。黒節病は大分で2条大麦に多発したほかは少発生にとどまった。縞萎縮病は福岡で大小麦に多発したほかは少発生となった。

転作物

大豆作付面積約16,000haのうち北九州地域の作付がもっとも多いが、発生の多い病害は葉焼病、べと病であった。品質低下の主因となる紫斑病の発生は広域に発生したが、一部を除き少発生となった。

野菜病害

レース J₃ によるトマト萎ちょう病がハウス内で福岡、長崎で発生し、福岡では KNVF 台木に接木した場合はほとんど発生しなかった。黒点根腐病の多発およびワタコナジラミ媒介のウイルス病が長崎で確認された。ナス縮病が福岡、佐賀で多発、イチゴ疫病（佐賀）、イチゴ根腐萎ちょう症（福岡）、褐色疫病（福岡）が多発した。長崎ではハウス内で変形菌である灰色ほりかびによるイチゴの障害が発生した。キュウリつる枯病、うどんこ病、疫病、WMV または CMV によるモザイク病が福岡、佐賀、大分、宮崎で多発した。メロン疫病、スイカ疫病および炭そ病が多発し、両作物の褐斑細菌病が大分で確認された。カボチャモザイク病、うどんこ病が長崎、沖縄で多発した。ダイコン黒斑細菌病、モザイク病が鹿児島で、ハクサイ黒斑細菌病、軟ふ病、モザイク病が福岡、長崎で多発した。キャベツべと病、モザイク病、軟ふ病、黒腐病が、タマネギ白色疫病、べと病が福岡、長崎、佐賀、鹿児島で多発した。ジャガイモ疫病は秋作でやや多発し、青枯病、黒あざ病も長崎で多発した。サツマイモのラシットクラック様症状の発生が鹿児島で増加し、宮崎でも局部的発生がみられた。ショウガ根茎腐敗病が長崎で多発した。

果樹・茶・特用作物

九州全域でカンキツかいよう病が多発した。黒点病は熊本、鹿児島で多発した。カンキツモザイク病および温州萎縮病が九州全域に分布していることが判明し、発生拡大防止策が問題とされた。ブドウべと病、つるわれ病、黒とう病、褐斑病が福岡、佐賀、熊本で多発した。ナシ黒斑病が福岡、熊本で多発し福岡ではポリオキシン耐性菌の出現により多発した例もみられた。茶炭そ病、赤葉枯病が福岡、大分で多発した。サトウキビ葉枯病、パイナップル花障病および疫病が沖縄で多発した

(九州農業試験場 環境第一部)

〔害虫発生概況〕

水稲・野菜・畑作では概して平穏無事な年であったが、果樹では全地域で各種果樹にカメムシ類が異常多発し、被害が大きかった。ミカンコミバエは10年来の雄誘引剤（殺虫剤加用）による撲滅防除が成功し、農林水産省は5月15日付けをもって奄美大島、喜界島、徳之島を発生地域から解除した。一方、ウリミバエは屋久島・種子島へ新たに侵入し、本土への侵入の危険性が大きくなった。

水稲・いぐさ・麦

セジロウンカ・トビイロウンカの初飛来は6月第2半旬で平年に比べ早く、以後3波の飛来があり、6月27日～7月3日の第3波が飛生の主体となった。セジロウンカは多目、トビイロウンカは北部では9月の低温で被害の進展が止まったが、南部では秋季多発型となった。なお、トビイロウンカが媒介するグラツシースタント病は、本年飛生地域が拡大し、沖縄を含む九州全域で発生が確認される。コブノメイガもウンカ類と同時に飛来し、飛来波が多かったため発生が不齊となり、防除適期の把握が困難であったが、秋季の発生は鈍化し、被害は前年に比べ少ない目に終わった。

カメムシ類は越冬期から高密度で発生が懸念されていたとおり、早期栽培で多発した。しかし、防除が徹底したので、被害は最小限度に防止することができた。普通期では一部で早生品種に多く、斑点米も発生したところもあった。以上のほか、イネゾウムシは被害は軽微であるが、北・西九州で分布が拡大しており、一部では平たん部の普通期稲へも広がっている。イネツトムシは大分県で局部的に多発したところがあり、鹿児島県では出穂後ヒメトビウンカが多目で、すす病を併発した。イグサシムシガは前年と同様に少なく、平年の1/4程度であった。

最近、エチルチオメトン（育苗箱施薬）によるツマグロヨコバイ、カーバメート剤によるトビイロウンカの防除効果が低下していると指摘され、その対策として代替

剤が使用されつつある。

麦では北九州でトビシモドキの発生が増加しており、とくに小麦で発生が多い。登録農薬がないので防除対策に苦慮している現状である。

転作物

昨年異常多発したハスモンヨトウは、本年は昨年よりも少なく、平年並の発生であったが、全地域で秋大豆にウワバ類（主体はミツモンキンウワバ）の発生が目立った。食用性の害虫で8月中旬から発生しはじめ、9月上旬～中旬に盛期となった。南及び西九州の夏大豆ではカメムシ類が多かった。種類はマルカメムシ、ホソヘリカメムシ、イチモンジカメムシ、アオクサカメムシで、南部ではミナミアオカメムシが加わる。しかし、秋大豆では全般的に少なかった。そのほか、ダイズサヤタマバエは昨年よりも発生が多く、今後転換畑で定着し、重要害虫となる可能性もある。

南九州の青刈トウモロコシとソルゴーで、7～8月にアブラムシ類及びアワヨトウが局部的に多発した。

野菜・畑作物

高温と乾燥のため夏季に、各種の野菜類でアブラムシ類とダニ類が多かった。また、全地域でアブラナ科野菜にコナガが多く、最近リン剤に対する感受性低下が指摘されているところである。露地・ハウスともピーマンにスリップスが多く、ナス・エンドウ・ウリ類でも被害が発生した。発生回数が多く防除が困難である。以上のほか、ネギコガ、ネギアザミウマ、ヤサイゾウムシ、ナ

昭和54年 水稲主要病害虫の発生状況（発生面積ha）

病害虫名	福岡	佐賀	長崎	熊本	大分	宮崎	鹿児島	沖縄
(病害)								
業いもち	4,709	4,423	8,000	18,500	16,629	10,746	11,413	369
穂枝梗いもち	13,483	4,294	1,200	11,200	18,030	15,176	13,959	29
紋枯病	39,682	4,795	21,000	26,500	30,900	30,734	30,340	392
白葉枯病	6,819	2,561	2,200	11,300	4,721	7,254	2,718	262
稈枯細菌病	11,195	1,280	3,000	2,500	4,690	50	4,337	—
縞葉枯病	10,706	165	200	100	1,800	409	490	—
萎縮病	23,669	546	7,500	10,800	10,460	11,008	17,577	—
黄萎病	0	1	0	10	0	8,540	676	—
ごま葉枯病	13,893	7,967	6,000	5,200	9,736	5,609	13,794	339
小粒菌核病	—	10	3,000	6,000	4,450	—	4,000	—
心枯線虫(虫害)	95	—	3,500	1,300	5,280	2,236	8,792	171
ニカメイチュウ(第1世代)	142	—	100	2,000	3,370	} 3,937	205	} 40
〃(第2世代)	156	—	100	3,500	1,800		190	
セジロウンカ	51,382	16,931	22,000	30,000	23,788	19,900	24,698	359
トビイロウンカ	55,756	13,570	22,000	29,800	27,283	20,687	24,203	362
ヒメトビウンカ	45,231	702	4,500	9,800	4,500	12,615	4,955	—
ツマグロヨコバイ	63,328	57,106	14,000	24,000	27,117	33,300	25,643	491
イネツトムシ	7,954	1,307	—	2,500	5,933	1,180	3,684	0
コブノメイガ	43,602	11,352	20,000	26,000	20,186	18,081	27,519	150
フタオビコヤガ	—	—	150	1,500	1,550	190	1,100	0
アワヨトウ	695	83	800	1,000	108	1,892	469	30
イネゾウムシ	—	3,180	3,200	8,000	7,500	2,074	1,811	—
カメムシ類	2,349	216	14,000	8,500	12,685	25,617	3,783	82

ノメイガが局部的に発生し、ウリミバエの北上は前述のとおりである。

畑作物では、南西諸島のサトウキビにバッタ類、コガネムシ類が、バレイショにジャガイモガが多く、ナスにも発生した。

果 樹・茶

各種果樹にカメムシ類が異常多発し、ミカン、ナシ、カキ、ブドウで落果や品質低下となった。近年防除意欲

の低下、放任園や管理不徹底園の増加に伴い、これらが発生源となるカミキリムシ類、カイガラムシ類の発生が増加している。また、適確な防除剤がないクリタマバチの増加も目立っている。カンキツでは夏季にハダニ類が、またミカンハモグリガも多かった。茶ではハダニ類、コカクモンハマキ、チャノホソガなどが多目の発生であった。

(九州農業試験場 環境第一部)